慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮本又次著 フランス経済史概説
Sub Title	
Author	下田, 博
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.6 (1943. 6) ,p.531(57)- 542(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19430601-0057
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430601-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たゞ總じてエルベ以東の地において新たに定着した獨逸人と現住民との間には深い鬱隙を生ずることはなく、土着貴族は獨逸人と同等の地位に置かれ、土着自由民も亦大なる差異なく、その大衆を形成する隷農も獨逸移住者の例にならつてその束縛を輕減されるもの尠くなかつたといふにとゞめる。これ等現住民をして、右にいふ市場に近づき進んでは自己も亦その渦中に在ることをも欲するやうな心性の變化を生ぜしめたものは、獨逸村落における農民の日常の行動であつた。現住民社會との接觸面において最も廣く、又縱令徐々にではあつても彼等の內面にまで及ぶ強い感化力を持つたものが、獨逸村落でありそれを構成する獨逸農民であつたことは既に觸れたところであるが、それは市場經濟に對する氣構えを作り上げる場合にも亦同じくいひ得るのである。

これによつてみれば、東獨逸植民において地方小都市とその市民とは、謂はゞ外部からこの地を市場經濟に捲き込む役割を演じたのであり、他方、獨逸村落とその農民とは、現住民をこれに指向せしめる上に大きな內面的影響を及ぼしたのであつた。從つてこの兩者孰れを缺いても東獨逸植民の達成は難かつたのである。

（1）土着プロイセン人に對する獨逸騎士修道會の對策については Clara Redlich, Nationale Frage und Ostkolonisation im Mittelalter. (Berlin. 1934). S. 98-101.

宮本又次著「フランス經濟史概說」

下田博

一

このたびの大戰において、さきの大戰に經驗したやうな「奇蹟」の再現を祈りつゝあつたフランスが、その祈願も遂に空しく、首都を無防禦の都市と自ら宣言し、パリをドイツ軍の手にゆだねたのが、一昨々年六月十二日のことである。そのときのことをアンドレ・モーロアはかう記してゐる。「……私は正午にビュク飛行場に行く豫定になつてゐた。それまでに妻と二人でパリの街の中で一番好きなところを、多分これが最後になるかも知れないから、訪ねてみることにした。私たちはアンヴァリッド、セーヌ河岸、プラス・ドゥフィーヌ、それからノートル・ダムなどに別れを告げた。この時ほど美しいパリはかつてなかつた。空はあくまでも澄み渡り、空氣はあくまでも爽かであつた。街では交通巡査が、この世の終りが近づいてゐないかのやうに、嚴重に車を停めて整理してゐた。誰も彼も、この大いなる悲しみは語らず、熱心に各自の任務を果してゐた。「フランスの一般の人たちつてほんとに素晴らしいと思ひますわ」と私の妻はいつた。「素朴で勇敢なのよ。こんなに立派な人たちがどうして戰爭に負けたんでせうかしら？」「人間といふものは」と私は答へた。「機械にかゝつちやどうにもならんのさ。兵士たちは戰線の死守を命

ぜられた。勿論、攻擊をうければ死守したでもあらうが、しかし、敵はその戰線を攻擊しないで、背後に迂回して包圍したんだよ。」「あたし、今となつても信じられませんわ」と妻はいふ。「ドイツ軍がパリに入城するだらうなんてこと……」

フランスはなぜ敗れたか。それはいまこゝでの課題ではない。われわれはたゞそれを、ルブラン大統領にかはり、八十五歳の老軀をひつさげて、フランス國家主席となり、元首の全權を掌握したありし日のヴェルダンの英雄ペタン元帥の同年六月二十日のラヂオを通しての悲痛な叫びに聽かう。「このたびの敗戰は國民のひとしく認めるところである。フランスは勝利と敗北とを交互に繰りかへしてきた。そしてフランス國民は或時は偉大さを發揮し又或時は脆弱さを示した。われわれはこのたびの敗戰から何等かの教訓を學びとらなければならない。前大戰の勝利や結果、享樂の精神が犧牲の精神にうちかち、國民は國家に對して奉仕するよりもむしろ要求するところが多く、且つまた努力さることをさけた。かくて今日の不幸が到來したのである。」このやうな敗戰をもたらす精神がなぜに漲るやうになつたのであるか。またモーロアはいふ。「われわれの青年がハリウッドの映畫のハッピー・エンドに樂しいスリルを感じてゐる時、ドイツの青年は、眞實の世界を作る爲に働いてゐたんです：かくて終局は苛酷なものでした。」かやうな相違がどうして生ずるやうになつたのであるか。それらは、いづれも、一朝一夕になつたものではない。それは久しきにわたつて培はれきたつたものであるし、またそれゆゑにこそ、われわれは歷史を通じて始めて、それらのことの因つてきたれる所以を、その奥底において把握することができるのである。この意味において、時局の認識と歷史の研究とは不離の關係におかれるものといひえやう。では、獨佛兩國の比較考察を、も少し、掘り下げて、歷史的にしてみるとどのやうなことになるであらうか。

いまから十年ばかりまへに、ガストン・ゼレル(Gaston Zeller)は、その好著「獨佛關係二千年史」(La France et l'Allemagne depuis dix siècles, 1932. (Collection Armand Colin—Section d'Histoire et Sciences Economiques—No 105.)本田喜代治氏譯書昭和十六年刊行)のなかにおいて、第九世紀の末葉に、フランク國が、ゲルマン的東部とローマ的西部とに分れて、こゝにドイツとフランスの區劃がたてられてから、凡そ一千年に亙る獨佛關係を流麗な筆致を以て誠に興味深く論述してゐる。この十世紀の兩國關係において、少くとも最初の六世紀は略ぼ「平和な關係」であり、その間兩國の「友誼的な傳統」がつくりだされ、かためられる。中世の終りから近世の初めにかけては、主權者達の往復書簡にも外交文書にも舊き同血關係を偲ぶことが普通のことになつてゐる。兩國の友情は「堅實な地盤」の上に立つてゐたといひえやう。しかも、イギリスの勢力に對して、ドイツは絶えずその海に向つた正面、ことに北方と西方とを注視しなければならなかつたし、フランスはまた「その商業上の利益と淡い夢の國の姿と」に惹かれて南方へ、更に「スラヴ人の侵入を防ぐ」ために東方へと眼を向けなければならなかつた。このやうに、彼等の活動が地平線の反對の方向にむけられたために、彼等の共通の國境が問題となることは餘りなかつた。國境は「摩擦の機會」であるよりも、寧ろ「邂逅と接近の場所」であつたのである。

その兩國が反目し「フランスの政策に對するドイツ人の不信」を招來する端緒となつたものは、とりわけ、一六四八年のウェストファリヤ條約であらう。フランスの諸王がドイツの事件に干渉しはじめてから、その處置が全く「公平無私」であると信ぜられたことは未だかつてない。いはゆる三十年戰役においても、「彼等がオーストリヤ家の力を弱めやうとして努力したとき、實は自國を偉大にするために盡力してゐたといふことは誰しもが知つてゐた。」果せるかな、この戰役の擧句に結ばれた前記の條約において、フランスは多く戰はずして、アルサスの大半とメッツ、

トゥール、ヴェルダン等のライン左岸一帶の地を得た。しかるに、ドイツは最大の損失を蒙り、人口は減少し、田畑は荒廢し、生産は不振に陷り、帝權は衰微し、諸侯は殆ど獨立の觀を呈し、その災害は遠くナポレオン戰役にまでも及んでゐる。そこに「ドイツ人をして、フランスのほんの些細な動きにも癡ひの眼を瞠らせる動機があつた」し、「ドイツの國會に差遣されるフランスの使臣達が、まるで、怨恨と偏見で出來てゐる敵性の雰圍氣のなかに生きてゐるやうな、印象を受け取る」やうになつた所以もあつた。しかし、ドイツとしてはフランスの援助を必要とする場合がまだ往々にしてある。そのやうなとき、フランヌの「エキュ」は受け取るが、甚だ「當惑」の態である。そして、その感じてゐるところを「言葉に出さなくても、その眼がこれを悟らせる。」かくて、兩國の同血關係は忘却のかなたへすてさられやうとする。

しかしながら、第十七世紀のフランスは蓋しヨーロッパの最大の富強國であり、路易十四世は「ヨーロッパの主宰者」である。フランスがこの大王を中心に歐洲制覇を成就し列國を驚倒しつゝあつたとき、ドイツは未だ幾百の諸侯に分裂して惱んでゐたし、更にナポレオンの大業がヨーロッパ全土を卷席しつゝあつたころにも、ドイツは「ナポレオンの忌諱に觸れることは何もしないやうに氣をつけてゐた。」しかるに、「神樣が、つまり雪とコサック騎兵とが、ナポレオン軍の精英を滅してしまつたときに」（ハイネ）そして「大軍隊」の敗殘兵がドイツを通つてゆく傷ましき光景を眺めたときに、どのやうな臆病者にも勇氣が與へられた。かくて、人も知る如く、一八一三年のライプチッヒの戰に、プロシヤの民衆はその國王と教授と牧師の音頭のもとに一齊にたちあがつた。學生が範を垂れた。ベルリン大學はからつぽになつた。國庫には殆ど一文もなかつた。獻金が勸誘され、溢れるばかりの金額が集つた。フランスに對するドイツ國民の感情の爆發は遂にドイツを「解放」しえたのである。戰の終る前に、プロシヤの政治家や評論家は、敗れたフランスから、アルサスとロレーヌの一部を要求しやうとした。アルントは「ラインはドイツの河でありドイツの國境ではない」といふ本までも著はした。

爾來「ラインの鄕愁」をめぐつて、獨佛抗爭の歷史がくりひろげられてゆくが、誠に、アルサス及びロレーヌは、ドイツにとつてもフランスにとつても、取らねばならず、取れば心配の種になる「宿命の地」である。ドイツがそれを得たのは周知のやうに一八七〇年の普佛戰爭によつてである。そして、この戰において、フランス軍を粉碎したプロシヤを中心勢力として、全ドイツの君主がヴェルサイユ宮殿に會し、ドイツの統一を宣し、同時にプロシヤ王ウィルヘルム一世が群臣歡呼の裡にドイツ皇帝の位に上つて、漸く近代國家の形態を整へたのであるから、その間に國民が偷安を貪つてゐる暇はなかつた。しかも、次第に國力の充實したときには、すでに世界の分割は一通り終つてゐたのである。第一次世界大戰の勃發は必然であつた。しかもまた、ヴェルサイユ條約に基く各種の負擔、とに極度の軍備制限と二千二百六十億金マルクといふ「天文學的」な數字の示す償金とを強ひられたドイツの再起も必然であつた。誠に、ドイツの歷史は苦鬪と建設の歷史である。フランスはどうか。

第一次大戰の前夜には、獨佛の拮抗は、その尖鋭さを失つたわけではないが、フランスにおいては、何人も戰爭を欲しなかつた。たゞ漠然と未來に希望をかけてゐた。「復讐の放棄」といふ論題にあからさまに反對するものは殆どなかつた。今次の大戰の前夜にも、歐洲の空を風靡したファッシズムの風潮に呼應して、ラ・ロック大佐の率ゐる舊軍人團クロア・ド・フー（「火十字」）を始め、シャルル・モーラ、レオン・ドウデ等のアクション・フランセーズを機關紙とする王黨等、フランス・ファッシストの一團は起つて、政黨政派を否定し、全體主義を肯定する點において、國內現狀への不滿を示し、その打破を要求したが、對外的には何ら積極的行動を取るを欲せず、たゞコムミュニズ

ムにして魔手を延べ、祖國の傳統の失はれやうとするとき、斷乎と是を擊ち、光榮ある三色旗を守らうとしたのである。從つて、それは國際的現狀維持であり、國粹保存であり、戰爭否定である。この國際戰爭否定は、ことに上記王黨の一人モーラが「代議士に向つて「もし、フランスを隣國との戰爭に捲き込むやうな不都合千萬な處置に出づれば、直ちに汝を殺すべし」といひ、この脅迫的言辭の故に起訴され、十一箇月の禁錮に處せられながらも、しかも是を以て愛國の至情に出たまでゝあると陳辯した事實に徵するならば、一入明白に肯づき得やう。このあたり、誠に、ヨーロッパの老大國を以て任じ、國際的現狀維持を說く「領有國」としての面目躍如たるものがある。

もとよりフランスは非常なる富國ではない。しかし、一口の一半が農業に、他が商工業に從事し、しかも企業的大生產よりも、むしろ家業的小經營を行へる中小農民や中小商工民の壓倒的に多數な國、金融財閥よりも、むしろプチ・ランチエの支配的な國、巨富は持つてゐないが每日の安穩な生活には事缺かぬ國、それがフランスである。そして餘暇と餘贏とを趣味と敎養の向上とに器用に充てゝ生活を享樂してゆく。「明澄な知性、洗練された趣味、エスプリに富んだ社交、濃やかなニュアンスをもつ繪畫、磨きのかゝつた文學作品、風雅な料理とシックな流行、凡そフランス的な魅力がそこから生れる。」このやうな獨立自營民の多き國フランスは、從つて政治的にはまた小黨分立の國であり、謂はゞ銘々が「一國一城の主」である。しかも、その政見は他國に比を見ぬ程に高級である。しかし、それが全體としての國民的行動となつて表はれえないことも他國にその比をみない程である。フランスの致命傷はそこにある。すべてが「箱庭」のやうに小ぢんまりと纏つてをり、小さく滿ち足りてをり、この倫安の花園を荒されさへしなければ「その心を左黨に向けながら、その財布を右黨に開くこと」も、「避姙墮胎から人口の減少を來すこと」も、文明人の敎養とされ、人類の向上とされる。「フランスのほかに國家がなく、フランス人のほかに人間がないのならば、或ひはそれでもよかつたかも知れない。」しかも、「葡萄と無花果の樹蔭に」安住し、食料を海外にもとめるために齷齪しなくてもよいところであるし、また「その靴の底から故鄕の土を拂ひ落すことのできない」ひとびとである。國際爭覇の問題に興味も熱意も失はれ去るのは當然であつたらう。

フランスの歷史は、いはゞ、ドイツのそれと對蹠的である。苦鬪の代りに倫安が、建設の代りに頹廢がみなぎりきたつた。だが顧れば、等しくフランクから生れて歐洲の地圖に姿を現した兩國である。十世紀前に別れて、それぞれ別々に遍歷の旅路を續け、遂に雙方が顏を見忘れるまで遠ざかつた兄弟である。いま互ひに血をば流し合ふことによつて、その血の同一を再認しやうとしてゐるといへないであらうか。三色旗の象徵した「自由、平等、博愛」は「勞働、家族　祖國」に塗りかへられた。忘れてゐた「勞働」に今更のやうに氣づいてドイツ人との協力にとりかゝつた。フランスの仇敵は同血の國ではありえない。フランス國家主席ペタン元帥は本年四月四日ラヂオを通じて國民に呼びかけ、國家救濟の美名にかくれて米英陣營に投じ、いはゆる民主々義擁護の走狗と化したド・ゴール及びジロー等の叛逆行爲を痛烈に彈劾し、その元兇米英を痛擊してゐる。「かつて同盟國としてともに戰つたイギリスは、フランス海岸地帶をはじめパリまで盲爆し、北阿佛領チュニジアを盜み、マダガスカルを掠奪し、アメリカを唆かしてマルチニックを騙取し、次ぎ次ぎにフランス帝國を侵してゐる。米英のいふ民主的自由主義とは自國のための自由といふことである。これを盟友と信じ、戰爭に突入したフランスはその歷史上最大の過誤を犯したのである。そしてこの誤謬を償ふ途は唯一つしかない。それは假面を被つた米英の民主々義、自由主義の本體を暴露し、その眞相なる世界制覇への野望を粉碎し、公平なる富の分配に基礎をおいた世界新秩序の確立を目指す日獨伊陣營へ積極的に參加することである。……米英の遺り方は昨日の友を今日の敵とすることである。しかるに日獨伊の遺り方

は昨日の敵を今日の友として遇することである。そしてこのことは日獨の佛印及びフランスに對する態度が明確に證明してゐるといへやう。」

いま東亞共榮圏の一環として佛印をもつ我が國は未だ嘗てみなかつたほどにフランスと緊密な關係をもつやうになつたし、ペタン國家主席はまた佛印ドクー總督に對して日本との協力を愈々緊密化すべしと命じてゐるとともに、ドクー總督も日本との協力をペタン主席への忠誠と共に印度支那の民衆に說いてゐる。たゞ、しかしながら、いふまでもなく、凡そ一國の植民は單に對外的に人を送り出すことではない。それは國家活動の外的表現であり、從つて、その根底には、その國民の世界觀が潛んでゐるし、またそれゆゑにこそ、佛印を把握するには、印度支那自體とともにまたフランスを理解しなければならない。われわれが大東亞共榮圏の確立を通じ、軈て世界新秩序創建の大業に着々と邁進しつゝあるこんにち、佛印やフランスに對する對策や研究が新たなる時代の脚光を浴びて改めてわれわれの眼前に登場して來なければならないのは當然のことである。

二

こゝに紹介する、宮本又次氏の「フランス經濟史概說」も、かやうな意圖から書かれたものと考へられる。それは「フランスの諸書、とりわけアンリ・セー、ゼルマン・マルタンの著書を祖述しつゝも、單なる飜譯や紹介ではなく、あくまで日本人の勘どころで表現しようとした……出來るだけ日本人としての眼で見、題で考へなほして行かうとつとめた」概說史である。

元來、フランスの社會經濟史學界において、時代別の、地方別の、もしくは產業別の良書の多きを誇れるに對して、いはゆる概論的に書かれた著書の少きことは一抹の寂寞を感ぜしむるものがあつた。その意味から、フランス社會經濟史學界の巨匠でありながら、アンリ・セエが、常に、歷史は現實的な諸資料に基いて研究し且つ多年に亘る然も多難な經驗を經た後に始めて通曉しうるものであるとなし、從つて愼重にも實に久しきに亙つて未だ探求されずに埋れてゐる資料の發見調査に眞摯な努力をつゞけてから、漸く晩年になつて、その豐富な資料と獨創的な見解とを傾けて一卷の概說史「フランス社會經濟史概論」(Henri Sée, Esquisse d'une Histoire Économique et Sociale de la France, depuis les origines jusqu'à la guerre mondiale, Paris, 1929.)を世に送り出したことは、いはゞ旱天に慈雨の與へられた感がふかいし、それゆゑにまた、わたくしも嘗て本書を江湖に推賞した一人である。(「社會經濟史學」第二卷第二號所載拙稿參照。なほ拙稿「故アンリ・セエ教授の略歷と著書」「社會經濟史學」第六卷第五號參照。なほまた、セエは、獨文を以て「フランス經濟史」(Französische Wirtschaftsgeschichte.)二卷を發表した。その第二卷の刊行されたのは、一九三六年三月十一日、實に逝去の數週間前であり、これが最後の勞作となつた。序ながら、アルマン・レビヨンによれば、本書は「社會經濟的發展に關するわれわれの知識の現在最も完全なる圖式」(Armand Rébillon, Henri Sée, sa vie et ses travaux, 1936, p. 8.)であり、そして一九三〇年に刊行されたその第一卷は前掲「概論」の單なる獨譯であるが、第二卷は素材も構成も新しく全く別の獨立の論著である。)しかしながら、かうした「外人の研究にはどこか我々の感覺にぴつたりと來ない何物かがあつて、ツボに手がゆきかねる憾みがある。」それを飽くまで、われわれの眼識を以て補正しやうとしたのが、宮本氏の意圖であり、覗ひ所である。

そこで、同氏の著書の結構をみるに、第一章において「封建主義以前の時代」を取り扱はれ、そしてそれを更に「ゴール時代」と「フランク時代」とに分けて概說され、第二章を「封建主義の時代」に充てられ、第三章の「商業資本主義の時代」を「絕對君主制の成立期」と「アンシヤン・レジームの時代」とに分說され、第四章を「大變革時代」に充て、そ

して第五章の「產業資本主義の時代」において「制限選擧君主制時代」と「普通選擧制時代」とを取り扱はれて、第六章の「結論」に及んでゐる。そして、それぞれの時代を取り扱はれるにあたつて、まづ、それぞれの時代の政治組織、社會組織乃至財政組織を概觀され、ついで、生產の組織と流通の組織とを概說されて、それぞれの時代の特徵を、驕てフランス社會經濟の特殊性を浮彫りにしやうと努められてゐる。これがため、アンリ・セエのいはゆる「ありふれた方法」ではあるが、「比較的方法」によつて、セエとおなじく、隨所にイギリスとの比較論述を行つて居られる。そして、全卷を通じて、その敍述は誠に手際よく且つあざやかである。

たゞ少しく望むらくは、フランスの社會經濟的發展過程における特殊性の因由を、も少し、フランス自體の裡に追求せられたかつたことである。そしてまた、恐らくは、それによつて、ともすれば單なる英佛兩國の現象形態の平面的な比較敍述に墮し去らんとする憾みすくなしとしないセエの比較論法を超克しうるのではなからうか。ことに、フランスの近代的性格の形成せられる前後の時代について、この感をふかうするのである。もとより、その詳論は場違ひであり、差し控へたいが、たゞ一例をあげれば、周知のやうに、中世末期、第十四世紀は反亂の世紀といはれるが、この世紀の危機がフランスにおいて一入深刻であつたのは何故であらうか。恐らく、封建的組織、フランク・ブランタノのいはゆる「保護的組織」（Funk-Brentano, Introduction au "Traicté de L'Oeconomie Politique" par Montchrétien, nouv. éd., 1889, p. xxxix.）が、この國において一段と鞏固に凝結してゐただけに、この組織の動搖せるとき、世紀の苦悶はまたそれだけ劇しかつたと考へられる。とすれば、フランス封建制の鞏固に確立された所以を明確に規定することが、やがて激烈な動亂の世紀をへて、絕對王制の確立される經緯を明瞭ならしめうる所以であると考へられるのである。そして、このことは、爾後の事態に相當に重大な影響を及ぼしてゐることであるし、またフランス國民のいはゆる熱狂的性格を說明する一つの輕視すべからざる契機をなすものと考へられるのである。氏がこのあたりを坦々と敍し去られてゐるのは少しく物足らなさを感ぜしむるものではなからうか。

更に、近代の開幕を告ぐる第十六世紀に始まる「發見の時代」におけるフランスの活躍の特殊性、また續いて展開される西歐列國の世界市場における國際貿易戰及び世界各地に對する植民地爭奪戰特にアジアの侵略におけるフランス型の闡明にも論及せられたならばとおもふ。われわれは今まで歐米の學者の手になる經濟史書が概ね世界の一部に過ぎないヨーロッパそれも主として西ヨーロッパに起つた事實を恰も全人類の發展史のやうな形態において然も頗る西歐本位に記述してゐることには不服である。されば、敍上の問題をアジア人たるわれわれの立場から解明されつゝ、フランスの對外政策乃至植民政策の特徵を明瞭ならしめられたならば、蓋し本書は一段と從來の西歐的なフランス經濟史に一新轉機を劃しうるものとなつたのではなからうか。

もとより、それぞれの時代、それぞれの問題についてみるならば、恐らく著者みづからもなほ詳述せられたかつたところが多々あることゝ推察せられる。しかし、本書は概說史である。それらはおのづから又別に取り扱はれるべきものであらう。誠に、特殊の時代、特殊の問題についてみれば、詳論してもなほ盡しえざるところ多きを如何せんやの感が餘りにも多きものがある。しかも、その研究の苦難は必要な苦難である。特殊研究こそは、やがて綜合史論の樹立に對して重要なる礎石をば與ふるものである。しかしながら、それとともに、多難な航海にあたつて常に優秀な羅針盤を必要とするやうに、多岐な特殊研究にあたつて一應の見通しと充分なる準備とをもつことはまた必要である。しかも、時代別の、地方別の、產業別の若しくは特殊問題別の研究に旅立たうとするものにとつて、氏の書が一つの優れた羅針盤となりうることは斷言してはゞからない。氏の勞は多とされなければならない。それ

宮本又次氏著「フランス經濟史概說」

と同時にまた、本書の卷末に「附錄」として「フランス經濟史學界の人とその文獻」や「フランス經濟史主要著書文獻目錄」等を掲げられてゐることは讀者に甚だ親切である。斯方面の研究に志さうとするものにとつて、蓋し本書は好箇の入門書たるを失はない。最後に、同攻の一人として、本書をえたことを大なる欣快とするものであることを附記して捫き且つ妄言著者の寛恕を乞ふべき紹介の筆を擱きたい。

（昭和十八年六月五日）

山田雄三氏「計畫の經濟理論」

氣賀健三

山田教授の新著は既に多數の學者によつて紹介批判を受けてゐる。筆者も亦かつて他の機會に氏の方法論的態度について一言する所があつたが、本書の他のもう一つの核心をなす經濟計算論については言及するを得なかつた。之までに公けにせられたる紹介・批判の論說においても、筆者の知れる限り、氏の價格論に關する所見を取扱つたるものは之を見ない。こゝに遲まきながら筆者の見解を述べて氏の統制經濟觀に對する疑問を明かにしたい。

山田雄三氏は統制經濟をば、一つの經濟秩序として考へ、しかも我々と同じく、自由經濟にも屬せず、計畫經濟にも移らぬ第三の型態においてその成立の可能性を論ずる。その型態の構想は、一つには各企業について獨占的團體が形成され、價格は獨占體に對して政府が定める。獨占的團體は之に對して單に數量反應を示すのみであつて、價格反應を示さない。價格は依然として選擇の指標たる役割を占める。それは「一方において消費・生產に關する個人的活動を認めて國家の指導を許すものであり、他方において價格を個人的活動の指標と認めつゝ國家の統制を考へるものである。」（同書二七七頁）。これは換言すれば、政府が價格を公定して獨占的生產者團體に之に從はしめ、一般消費者には消費選擇の自由を許すことを意味するのであらう。而して國家が公定する政治的價格の標準は、決